

富山経済同友会

会報

2026.9月
No. 332



新会員歓迎オリエンテーション（8月24日）

CONTENTS

- 7月会員定例会 2
- 【講演録】7月会員定例会：大森 昭生 氏 ... 2
- 第2回日本海沿岸地域経済同友会サミット富山大会 ... 9
- 富山県との意見交換会 10
- 第8回交流委員会 11
- 第4回地域創生委員会（前橋視察）..... 12
- 人財育成・活躍、企業経営、デジタル推進
委員会（合同委員会）..... 14
- 新会員歓迎オリエンテーション・懇親会 ... 15
- 文化芸術、地域創生、観光戦略委員会（豊岡合同視察）... 16
- とやま教育共創フォーラム 18
- 課外授業講師派遣 20
- 小・中・県立学校3年次校長研修会 23
- 富山市中堅教諭等資質向上研修 24
- 活動報告 25
- リレーエッセイ^⑬（矢澤 剛志 氏）..... 28
- 会員の入退会 29
- 今後の予定 35
- わが青春の1枚（稲葉 伸一 氏）..... 36

「地学一体」の学びが拓く地域の未来

大森 昭生 氏講演 — 7月会員定例会 —

7月27日(月)、ホテルグランテラス富山において7月会員定例会を開催し、共愛学園前橋国際大学学長の大森昭生氏が、「Community Based University をめざして～共愛学園前橋国際大学の地学一体の学びを中心に～」と題して講演した。今回は教育を考える委員会が主管し、会員約100名が参加した。

大森学長は、冒頭、18歳人口の減少が進む中、地方大学の課題は大学単体の問題ではなく、地域課題であると指摘。続いて、地域企業や行政と協働して実践的に学ぶ「地学一体」の取り組みや、学修成果を可視化する独自のシステムを紹介し、地域に定着する若者を育てている現状

を説明した。最後に、2040年に向けた地方大学の経営危機に触れ、高等教育への投資を「未来への先行投資」と捉え、地域一体で次世代を育む重要性を訴えるとともに、富山の大学を地域全体で支え、盛り上げていくことを呼びかけた。

その後、同大学国際社会学部国際社会学科4年生の田島羽遥さん、今泉花凜さんが、地域をフィールドとした実践活動を通じた学びや成長についてプレゼンテーションを行った。地域の課題に向き合い、自ら考え、行動する学生たちの姿に触れ、参加者は「地学一体」の教育の成果を実感するとともに、学生たちの主体性や行動力に大きな刺激を受ける機会となった。

7月会員定例会(2026.7.27)講演録

「Community Based University をめざして ～共愛学園前橋国際大学の地学一体の学びを中心に～」

共愛学園前橋国際大学 学長 大森 昭生 氏



(プロフィール)

学校法人共愛学園副理事長／共愛学園前橋国際大学学長
1968年 宮城県仙台市生まれ。
共愛学園前橋国際大学国際社会学部長、副学長等を経て、
2016年より現職。専門はアメリカ文学で特にヘミングウェイを研究。
文部科学省中央教育審議会の各種委員他、群馬県教育振興基本計画
策定懇談会座長、群馬経済同友会次世代育成委員会副委員長等
地域における各種公的委員を多数務め、各地での講演多数。
群馬県総合表彰（男女共同参画分野）。
全国の学長が注目する学長ランキング5年連続1位
(大学は教育で注目する大学5位)
(大学ランキング2023～27)。

◆ 共愛学園前橋国際大学の紹介

本学を運営する共愛学園は、明治21年に前橋で、群馬出身の新島襄も発起人の一人となって設立されました。今や子ども園から大学まで全

ての学校種を持つ総合学園です。大学は赤城山を望む「ザ・田舎」の地にあります。国際社会学部、そして政府が主導する成長分野の人材育成支援の拠点に選ばれ、今年新設したデジタル

KOUENROKU

共創学部は2学部から成ります。入学定員は今年から350名に増えましたが、実はこうした小規模の大学は日本の大学の7割を占めます。国際社会学部は「地域の未来は私がつくる」、デジタル共創学部は「社会の未来は私たちがつくる」をキャッチコピーに、「共に愛し共に生きる」という新島の教えを140年にわたり大切にしています。

学びのテーマは「グローバル」です。ローカルにありながらグローバルな視野を持ち、ウェルビーイングな社会づくりを目指します。アクティブラーニングが中心で、授業の風景は昭和の大学のイメージとは全く違います。中でも、オフキャンパスというキャンパスの外に出て学ぶ授業が多いのが本学の特徴です。ディプロマポリシーは学生が4年間で「共愛12の力」を身につけることです。予測困難と言われる時代に、自分の力で幸せになってもらいたい。その力を身に付けるために、大学はあると考えています。

先ほど、全国の学長が注目する学長ランキングで、私が1位とご紹介いただきましたが、大学が5位であることの方が大事だと思っています。本学は約10年間トップ10入りしており、今年は東北大を抜きました。学長たちが自らの大学にもいい取組を導入したいと様々ウオッチする中で、注目を浴びている結果と捉えています。

また、地方の大学に学生が集まらない中、おかげさまで本学の学生数の推移はずっと右肩上がりです。大学には定員があるため、通常は学生数が右肩上がりになることはありませんが、実は、本学は定員を少しずつ増やしています。定員を増やすには文科省の認可を受けなければならない、なぜ増やすのか、増やして大丈夫なのかという説明も必要で大変なことなのですが、少しずつ増やしてきた結果、現在は過去最高の学生数となっています。

本学の取組はさまざまな場で好事例として紹介されており、「注目の学長」1位ということで

林修先生がインタビュアーの「日曜日の初耳学」に出演させてもらったり、地方大学の在り方等でNHKやローカルのテレビ局、各種メディアなどからもお呼びいただいております。

◆ 「地学一体」が学びの旨

本学の学びは「地学一体」を旨として、この10年ほど「KYOAI GLOCAL PROJECT」を展開しております。アクティブラーニングのための校舎で、学生たちが毎日ディスカッションしながらいろんな取組をしています。国際的には世界二十数大学と連携を持ち、約40の海外研修プログラムを実施しています。海外の大学に行くだけが留学ではありません。「ミッショングローバル研修」は地元企業のビジネスミッションを遂行するものです。学生はタイのバンコクの街に、いわば放り出されるという形で、海外で課題解決をします。後で今泉さんからこの、所謂「地獄の研修」の話があります。また、本学は小・中・高の教員も養成していますが、今や小学校の先生にも英語が必要なので、オーストラリアの小学校で教育実習をしてくるといったプログラムもあります。

一方、地域面では、2年生必修の「グローバルセミナー」があります。理想の前橋のまちをレゴでつくります。大学には様々な専門分野の教員がいますが、全教員が担当になり、1年間かけて、学生と一緒にデータドリブンな地域課題解決に取り組み、みんなで地域の課題をディスカッションしていくPBLをやったりしています。

また、大学に通う代わりに、4か月間、市役所や地元企業等で働くインターンシップも行います。教室で勉強するよりずっと学びになっていると感じていて、学生は本当に成長して帰ってきます。

そして、「バーチャルカンパニー」という1、2年生の授業があります。仮想企業をつくり、

調べた群馬の特産品を使い、地元企業と組んで商品開発を行います。企業へは学生が直接出向き、交渉します。大学側の準備ではないので断られるケースも多々ありますが、単位取得のため学生が必死に頑張る中で、群馬そのものを知ることにつながります。

また、教員養成のため、公立の小学校で毎日二人の学生が勤務しています。そのため、職員室には学生用の机と椅子が2脚常備されています。先生方が研修等で人手が必要な際に、学生がスタッフとして現場で役に立てているようです。当初は、「雑用をやらせてもらえばいいですよ」と始めたのですが、先生方が熱心に指導してくださり、学生は教育実習に行く前に現場を知ることができます。今では小学校の先生が学期後に振り返り学習も行ってくれます。

つまり、本学のような小さな大学でも地域に開いていくと、企業や市役所、学校など多くの方々が先生として地域にいて、いろんなことができます。逆に、大学人は大学では不可能なことが山のようにあるのを認識すべきだと思っています。我々は日々研究を行う教育のプロですが、大学の中だけでは、現場や実践の経験を十分に得ることはできません。学びだけでは学生たちは将来にコミットできない。理論と実践の往還が彼らには絶対に必要ですから、地域に開いていくのです。

まちの課題に向き合う中で、学生が山間地域に住むお年寄りの孫になりに行くような授業もあります。限界集落の現実を目の当たりにしながら、地域の食や祭り、風習などを知り、本当の地域の姿を学んでいます。また、富岡製糸場のある群馬ですのでシルクをテーマにファッションショーをしたり、PBLにも取り組んでいます。前橋市はイタリアから認定を受けた「チッタスロー」というスローシティなのですが、スローシティをテーマに、赤城山の中腹の公民館を拠点としている授業もあります。

首都圏の大学も地方への関心が高まっており、東大の院生による「キャンパスアジアビジッ



ト」の前橋訪問では、本学の学生がアテンドを行いました。また、慶應大学の学生たちと一緒にプロジェクトにも取り組んでいます。群馬が誇る太陽誘電さんでは、半年間かけて最先端技術を社会課題の解決にどう応用できるかを考える取り組みをしています。

また、学生が出ていくだけでなく、地域の方が提供してくださる授業もあります。前橋市役所や群馬県庁、中小企業家同友会、上毛新聞、起業家の会、群馬日産など、地域の様々な主体に寄付講座としてご協力いただいています。中でも群馬県庁には、授業を3つも提供していただいています。

「地学一体」と呼んでいるわけですが、地域と一緒にやっていく。連携は異なる主体同士が手を結ぶことですが、本学は前橋や群馬と別物ではなく、地域の一部でしかないはずなので、別々の主体として手を結ぶのではなく、「一体」として一緒にやっていくことが大切だと考えています。また、人材を必要としているのは、大学ではなく地域の皆さんですから、大学と地域が一緒になって目の前の若者を育てましょうという呼びかけの意味も、「一体」には込めています。

大学にとっては社会貢献や地方創生としての役割も必要ではありますが、学生が「地域の未来を私がつくる」と言えるよう、「共愛12の力」を身につけることを目指しています。「『共愛12の力』を育むために、4年間一緒に歩いていこうね」というのが、学生たちとの約束です。こうした考えから、「地学一体」を掲げています。

KOUENROKU

◆ 学修成果を可視化

「共愛12の力」はお題目ではありません。小学校であれば「明るく元気で素直な子」のような目標はありますが、卒業時にそれは検証していないと思います。しかし本学では、この「共愛12の力」を身につけられたのか、つまり学修成果を可視化する仕組みを持っています。それが「KYOAI Career Gate」(KCG)というポートフォリオのシステムです。

学生は4年間、このKCGの中に、学びの振り返りや活動の履歴を蓄積します。それをエビデンスとして、評価基準(ルーブリック)によって毎年自己評価します。その後、先生との面談でこれを精緻化させ、最終的には、ためたエビデンスをウェブ上の「ショーケース」を通じて社会に開示します。つまり、自分たちの学びを自分たちの言葉で表現し、数値でどこまで伸びたかを毎年確認するという教学マネジメントを行うのです。また、卒業に必要な124単位のうち、学生は地域か海外、できれば両方に出なければ卒業できないカリキュラムになっています。なので、地域に出る授業も海外に出る授業も年間40以上用意して学生が選択できるようにしています。こうした学びを「ショーケース」を通じて企業にも可視化することで、新たな採用にもつながっています。後で田島君が紹介してくれると思います。

本学では「共愛12の力」を学生自身が理解し、4年間の学びの目当てとして共有しています。小学校の授業のように、目当てと振り返りを明確にすることで、学生が自分の成長を意識できるようにしています。また、デジタル共創学部でも、デジタルの知識だけでなく地域での学びを必修としています。地域の課題を解決するためにデジタルを学ぶのですから、そのためのカリキュラム構成になっています。

文科省が実施する全国学生調査では、学生の評価が高い大学として、ポジティブリストにも

掲載されています。こうした結果を学生自身も理解しており、大学での学びや取組への実感につながっています。

実は本学も十数年前は地元就職が4割から5割でした。しかし、地域と共にいろんな「地学一体」の学びをやってきたことで、今では7割から8割の学生が地元就職しています。高校生の段階では地元のBtoB企業を知る機会は少ないですが、大学で地域と様々な取組を行う中で、地域企業の存在や魅力を知るようになります。本学の群馬県出身者は9割です。地域から学生を預かり、地域にお返ししていくことが本学の使命であり、学生に「地域」という選択肢を意識してもらえる環境をどうつくるかが大切です。

◆ 地方創生と高大接続

大学が地域にあることで、地方創生や地域の教育力の向上にも役立てていると考えています。学生たちは大学のプログラムに限らず、子ども食堂の立ち上げやイベントの開催、地域行事へのボランティア参加など、主体的に地域で活動しており、学生がいること自体が地域の活性化につながっています。

また、前橋市の事業として、産学官のプラットフォームを組んで地域課題に向き合う取組も行っています。この協議会の会長は市長で、私と商工会議所の会頭が副会長です。群馬大や市立前橋工科大、県立県民健康科学大、そして私大、専門学校も参画し、例えば次世代経営人材育成のビジネススクールなども展開しています。先日、文科省の私の委員会で創出した地域構想推進プラットフォーム事業に富山県も採択されました。ぜひ産学官が協力して、地方創生を推進していただければと思います。

それから、高校での学び、これも非常に重要だと思っています。例えば本学は様々な高校と協働しています。県内トップの進学校である県

立前橋高校では、生徒たちの探究活動開始に向けて、毎回私がその意義や進め方についてレクチャーしています。そのほか、多くの公立高校にも学生や教員が行って探究学習を支援しています。また、課題研究授業の一つを本学が担当し、履修した生徒には大学で認められる4単位を授与する高校もあります。本学の学生が地域や企業の方々に育ててもらっているのと同様に、我々は地域の未来を創る人材となる高校生の学びを一緒につくっています。

大学が行っていることは高校の教育改革に直結します。今高校の世界では、ネクストハイスクール構想という大きな事業が動いています。私も委員の一人ですが、これは、その県や産業界が議論して、2040年にこんな人がこれだけ必要という人材需要を念頭に置いた高校の教育改革プログラムを提示することによって、その県に62億円が交付されるものです。ぜひ産業界の皆さんは県教委とタッグを組んでいくことをお願いできればと思います。

そのほか、本学では高校生研究員の受入れ、高校生の探究型インターンシップがあります。また、県主催の「始動人 Jr キャンプ」やぐまプログラミング・アワードのバックヤードも務めています。

また、既に終了した事業ではありますが、経済同友会と連携し、大学が高校と企業の間をつなぐ取組も行ってきました。高校の進路指導担当者に企業が求める人材や大学での学びを伝える一方、経済界には、高校教育が変わり、探究学習などを重視するようになっていることを知ってもらうなど、双方をつなぐ役割を大学が担ってきました。

群馬県教委が地域版「トビタテ!留学 JAPAN」の事務局になっており、今年は50人を海外に派遣しました。高校生は自らの探究テーマをつくり、それを解決するために、海外渡航計画を立て、飛行機のチケットまで手配して向かいます。

その探究テーマをつくるために、県内の全大学がメンバーになって先生たちにアドバイス、また最初の段階では学生に壁打ちができる関係をつくっています。ちなみに、本学前学長が現在、群馬県教育長を務めるなど、地域の教育行政にもつながっています。

◆ 地方大学の問題を自分ごとに

2040年はターゲットイヤーと言われますが、実は大学の世界では2035年が大事で、その先は18歳人口が断崖絶壁のように減少します。これに耐え得る体制を地域でつくる必要があるので、政府の日本成長戦略本部の人材育成分科会でも地域大学の必要性を説きました。

群馬の18歳は2040年に今の6割になります。これは数の上では「うちの大学、要らないんじゃないか」という話になります。でも、それでは、群馬の人材は誰が育てるのか。地域の大学の課題は、地域の課題であるということです。富山県においても、地域構想推進プラットフォームの中で、どのような人材が求められるのかを考え、その人材を育成するために大学に何が必要なのかを検討していくことになります。将来の予測は難しいですが、だからこそ地域全体で考えていくことが大切です。

もう一つは、少し私学寄りの話になりますが、富山県でも経験されたように、個々の学校法人の経営判断だけでは、大学はクローズしていきます。日本の大学生の8割が私立大学生です。一方、私学への補助は国立の13分の1です。つまり、自腹で大学に通う割合が非常に大きいのが日本の特徴です。私立大学には年間予算の1割しか国から補助がありません。残り9割を学費で運営しているため、学費が高いのです。また、学校法人は非営利組織なので、利益も出せません。つまり、大学は学生が来なくなったら駄目になるのです。国は助けてくれませんので、ぜひそういう観点で地元の大学を見ていただ

KOUENROKU

るとありがたいなと思います。地方大学がなくなると、エッセンシャルも含め、地方で必要な人材がいなくなります。経済界にも応援いただければと思います。特に短大がなくなると保育士が育たず、大変なことになります。地方の大学の問題は、地域が自分ごととして捉えるべきであることを共有できたらありがたいと思います。

中央教育審議会の特別部会副会長という立場で文部科学大臣への答申をまとめたものの中でも高等教育への投資は未来への先行投資であり、地域の皆さんにも自分ごと化していただきたいと書きました。富山大学が主導する地域構想推進プラットフォームがこれから始動しますが、今日を機会に、地域一体となって富山県を盛り上げていただきたいと思います。

■ 田島 羽遥さん

(国際社会学部国際社会学科 心理・人間文化コース4年)

私が本学への入学を決めたきっかけはオープンキャンパスです。学生が一から作るオープンキャンパスに参加し、「先輩、



めっちゃ格好いいな」と感じて、そのまま入学を決め、先輩のように、地域と関わる授業を頑張りたいと思いました。先ほど学長からも紹介のあった、レゴを使った「グローバルセミナー」は前橋市の現状や課題を明確にして解決のアイデアを発表する授業です。ただ、発表して終わるもので、実際にアクションを起こすことができなかったため、自分でアクションを起こしたいという気持ちになっていきました。その他にも、シャッター街になった商店街の一部を使った授業で企業の方から直接お話を聞き、企業も若者の力や意見を求めていると強く感じ、新しいことに挑戦したいという気持ちが大きくなり、

イベントなどを企画するようになりました。

例えば、若者の流出防止を図る「ぐんま女性議員政策会議」や、富岡製糸場の近くをまち歩きする「富岡げんきフェスタ」、留学生と一緒に日本語を学ぶイベントなどを企画、展開しました。中でも「ファン共創セッション」は、前橋市が市内外に向け、前橋市ファンを増やすためのアイデアと一緒に考え、事業化する市民参加型のワークショップで、市役所、本学教授と学生、総務省がタッグを組んで取り組むものです。苦勞したのは企業の方との信頼関係構築や、地域や企業への理解不足でした。そのため、企業主催イベントにボランティアで参加するなど、信頼関係の構築に努めました。

こうした活動を通して自分が一層地域のファンとなり、大学入学時の「知る側」から「知らせる側」となることができました。また、子どもたちに地域の良さを伝えたり、群馬の関係人口や若者が活躍できる場を増やしたいと思うようになりました。

「共愛12の力」を示す KCG のグラフで言いますと、こうした中で磨かれた「主体性」や「協働する力」、「実践的スキル」が現時点でマックスのレベル4になり、他の力は残りの期間で育んでいきたいなと思っています。いろんな方との関係を築き、グローバルな学びを得られたことで、何者でもない学生が、「格好いい先輩のようになりたい」という利己的な人間から、誰かの幸せを願い、それに貢献したいと思える利他的な人間になれたのかなと感じています。

入学当初は、「卒業後はきっと東京で就職するだろうな。群馬はそこまで好きじゃないし、魅力度ランク下位争いの県だし」と思っていたのですが、プロジェクトなどを通して、群馬県の魅力を知り、みるみると愛着が湧きました。群馬は人が温かく落ち着ける、ここにしかない良さがあります。それを裏づけるように、今や移住希望地ランキングの全国1位です。

来春からは群馬トヨタ自動車株式会社に就職します。就職活動も本学独自のルートで、KCGのショーケースに蓄積した自分の頑張りを企業に見ていただいて選考が進み、内々定をいただくことができました。就職後もイベントや学生運営の行事、企業や地域の方との交流を続け、今度は私が地域や学生に全力で恩返しをしたいです。

■ 今泉 花凜さん (国際社会学部国際社会学科情報・経営コース4年)

明確な目標や行きたい学部がなく、当時は「実家から通える群馬県内の大学」を探していた私ですが、高校での地域探究授業をきっかけに地域の学びに興味を持ちました。本学のオープンキャンパスに参加し、オフキャンパスで学び、地域でイキイキと活躍する先輩たちの姿に強い憧れを抱き、入学を決意しました。その憧れを現実にするため、本学ならではのアクティブで実践的な学びに挑んできました。



まず1年次には「バーチャルカンパニー」という授業で仮想の企業を運営し、実際に企業へアプローチして提案活動や商品開発に挑みました。正解がない実社会の中で、自分たちで考えて行動しながら形にするという、大学生としての活動の土台を築くことができました。続く2年次には、「地獄の研修」とも呼ばれる2週間の「ミッショングローバル研修」に挑戦しました。タイのバンコクという、言葉も文化も違う環境で、毎日厳しいビジネスミッションに取り組み、街頭インタビューなどの市場調査やプレゼンを繰り返す中で、多様な文化や相手の視点を理解して行動する姿勢や、限られた時間で成果を出す突破力や柔軟な対応力を養いました。

さらに3、4年次には、グローバル研修での縁をきっかけに始まった「共愛果茶プロジェクト」に挑みました。飲料メーカーやスーパーと協働し、Z世代に向けた飲料「共愛果茶」の企画から販売までを手掛け、第1期は19万本、第2期は21万本を生産・販売し、現在は第3期の新商品開発に取り組んでいます。ビジネスの一連のプロセスを経験する中で、現場で求められる思考力や調整力、実行力を養うことができたと思います。

こうした実践的な学びを積み重ね、「まずはやってみる」という小さな挑戦から「共愛12の力」を身に付け、社会に求められる人材に近づくことができたと感じています。本学の強みは、「誰にでも挑戦できる環境があること」、そして「地域を学びのフィールドにして、知識を実践するための知恵へと昇華させられること」です。そして何より、学生の挑戦に地域や企業の方々が真摯に向き合い、温かく支えてくださったことが最大の財産です。

現在は、この、地域に育ててもらった恩を返すため、学外でも活動しています。大学生が企業の名前や規模だけで就職先を選ぶのではなく、本当に共感できる企業と出会えるよう、企業名を伏せた対話を通じて価値観でマッチングさせる合同説明会「コトバとシゴト」を企画運営し、若者のキャリア支援や地元定着に力を注いでいます。

卒業後は、大学で培った経営や情報の専門知識を活かし、地域の中小企業のDX推進や業務効率化を支援する企業に就職することが決まっています。地域の中で多くの大人に支えられ、育ててもらった私だからこそ、今度は自分が「地域を支える存在」となり、いただいた恩を倍返しできるよう全力で貢献していきたいと考えています。

日本海側国土軸の戦略的活用

— 第2回日本海沿岸地域経済同友会サミット富山大会 —

7月8日(水)、北海道、青森、秋田、山形、新潟、福井、京都、神戸、鳥取県、島根、沖縄、富山の12経済同友会の代表幹事等45名が一堂に会し、「第2回日本海沿岸地域経済同友会サミット富山大会」がANAクラウンプラザホテル富山にて開催された。当会からは、麦野、牧田、松田代表幹事をはじめ、桶屋、大橋副代表幹事、棚田日本海サミット委員長が出席した。

本サミットは、前身の「日本海沿岸地域経済同友会代表幹事サミット」を新たな形に改め、昨年から「日本海沿岸地域経済同友会サミット」として再始動し、東京一極集中の是正と日本海側地域の連携強化を目的に、12経済同友会の持ち回りで開催している。今回の富山大会では「大規模災害に備えるー日本海側が果たすべき役割ー」をテーマに、南海トラフ地震や首都直下地震などの大規模災害を見据え、日本海側国土軸の戦略的活用による国家全体のレジリエンス強化について議論した。

冒頭、麦野代表幹事が「近年、全国各地で大規模災害が頻発しており、南海トラフ地震や首都直下地震についても、その発生が切迫している。太平洋側が被災した際に、日本海側がいかに代替機能を果たせるかが大きな課題である。本日のサミットが、具体的な連携の第一歩となることを期待する」と挨拶した。



麦野代表幹事

続く第1部の基調講演では、東京大学地震研究所長・教授の古村孝志氏が「日本海沿岸における大地震と南海トラフ地震・首都直下地震の波及影響」と題して講演した。古村氏は、太平洋側と日本海側における地震・津波の特徴の違いを解説するとともに、「日本海側は地震が少ない」という認識は科学的には適切ではないと指摘。その上で、



古村 孝志 氏

大規模災害発生時の代替機能を確保するため、平時から日本海側へのデータセンターや海底ケーブルの分散配置を進めることに加え、交通・物流インフラの強靱化を図ることの重要性を訴えた。

続いて日本海サミット委員会が取りまとめたアピール文案について、牧田代表幹事をモデレーターとして、活発な意見交換が行われた。意見交換では、「『日本海側国土軸』の考え方は非常に意義深い」「政府へのアピール文の提出をはじめ、広く周知していくべき」といった意見が寄せられ、議論を経て、アピール文案は全会一致で採択された。



牧田代表幹事

第2部の交流セッションでは、新田富山県知事、藤井富山市長による来賓挨拶に続き、松田代表幹事が「能登半島地震から復興が進む中、あの時の教訓を風化させないためにも、今回のサミット開催は大きな意義がある。各地域で『輝く日本のために何ができるか』を考え、互いに力を合わせて取り組んでまいりたい」と述べ、乾杯の発声とともに開宴した。



新田知事



藤井市長

最後に、次期開催地を代表して島根経済同友会の山崎徹代表幹事が「島根大会においても、日本海沿岸地域の連携によってどのような価値を提供できるのか、皆様とともに議論を深めていきたい」と挨拶。来年7月27日の島根大会での再会を誓い、第2回サミット富山大会は盛会のうちに幕を閉じた。



松田代表幹事

官民連携で拓く富山の未来

— 富山県との意見交換会 —

8月19日(水)、富山電気ビルディングにおいて、富山県との意見交換会を開催した。富山県と当会がこれまで以上に連携を深め、地域が抱える諸課題に官民一体となって取り組むことを目的としたもので、今回で2回目の開催となる。

当日は、富山県から新田八朗知事、西経子副知事、川津鉄三知事政策局長、田中雅敏経営管理部長、小杉健商工労働部長の5名、当会から麦野、牧田、松田代表幹事、桶屋、大橋副代表幹事の5名が出席した。

意見交換会は牧田代表幹事の進行のもと行われた。冒頭、麦野代表幹事が「能登半島地震から約2年半が経過した今も、現地には深刻な被害が残っている。大規模災害は全国どこでも起こり得る中、当会では『東京一極集中』の是正を訴えてきた。その実現には『日本海側国土軸』の構築が重要と考えており、7月8日に開催した日本海沿岸地域経済同友会サミット富山大会でも、このテーマについて議論を重ねた。今回の意見交換では率直に意見を交わし、官民一体となって地域社会の発展や国土強靱化に取り組んでいきたい」と開会の挨拶を行った。

これを受け、新田知事からは、当会の活動や県の政策推進への協力に対する感謝の意が示されるとともに、「本日は、日本海サミットで取りまとめられたアピール文も踏まえ、インフラや国土強靱化、地域産業の成長、農林水産物等の輸出促進など、幅広く意見を交わした

い」との期待が述べられた。

続いて、大橋副代表幹事から「第2回日本海沿岸地域経済同友会サミット富山大会」の開催概要と、同サミットで採択したアピール文「大規模災害に備えるー日本海側が果たすべき役割ー」について報告したうえで、県に対し「首都機能の移転」「災害時における富山県・静岡県相互応援体制」「令和の公共インフラ・ニューディール政策」のそれぞれについて説明を求めた。

意見交換では、アピール文と、県より意見交換のテーマとして提示された「富山県の産業振興」を軸に、地域経済の持続的な発展に向けた幅広い議論が行われた。県からは、県内産業の成長や県産品の販路拡大など、富山の強みを活かした産業振興の方向性について説明があり、今後の地域経済の成長に向けた取り組みについて活発に意見を交わした。

また、首都圏で大規模災害が発生した場合を見据え、富山県が有する地理的特性や産業、インフラの強みを生かし、災害時の代替機能や後方支援の拠点として果たすべき役割についても議論。防災・減災や国土強靱化に向けた地域間連携、インフラ整備の重要性について認識を共有した。

このほか、循環型経済や先端産業など、今後の成長が期待される分野についても意見交換を行い、富山県の持続的な発展に向け、行政と経済界が連携して取り組むことの重要性を確認した。

最後に松田代表幹事が、「今回のように、互いに本音で話し合える関係を築けていることは、本当に素晴らしいことだと感じている。これからも官民が一体となり、互いに切磋琢磨しながら、富山県の未来を真剣に考えていきたい」と述べ、意見交換会を締めくくった。

その後、会場を移して懇親会を開催し、和やかな雰囲気の中で交流を深めた。



牧田代表幹事



麦野代表幹事



新田知事



松田代表幹事



「入ってよかった」のために — 第8回交流委員会 —

8月6日(木)、第8回交流委員会（伊東潤一郎委員長）を海風亭（魚津市）にて開催し、委員7名が参加した。

最初に伊東委員長が、挨拶の後、6月19日(金)に東京で開催した全国立山大使との意見交換会について、参加者から、富山での活動が非常に濃く有意義だったと好評である一方、他地域へ転出した瞬間に繋がりが切れてしまうため、デジタルツール等を利用して関係を維持できれば嬉しいとの要望があったことを報告した。委員からは、交代で富山を離れる会員に対し、「全国立山大使の会」への入会案内・手続きの説明等を徹底するべきとの提案や、富山経済同友会の大きなイベントに全国立山大使が参加できるようにするアイデアなどの意見が交わされた。

続いて、会員エンゲージメント向上に向けた取組みのひとつである「会員満足度調査」の実施について確認した。会員にとって富山経済同友会での活動がより活発で実りあるものとなるように、またより多くの会員のニーズに応えら



れる活動内容を検討していくためには、どのような設問が必要か、具体的な内容についての議論が活発に行われた。

最後に、大橋担当役員が、会員が同友会の活動を楽しんでいると思い、様々な交流ができて有意義と感じてもらうことで、会に対する愛着が生まれ、エンゲージメント向上へと繋がっていく。「入ってよかった」と思ってもらえる活動を検討していきたいと締めくくった。





『民主導・官サポート』の先進地へ — 第4回地域創生委員会（前橋視察） —

7月3日(金)、第4回地域創生委員会（橋本淳委員長）を開催し、委員27名が参加。「民主導・官サポート」の考え方のもと、官民共創の仕組みや地域資源を活かしたまちづくり、民間主導による地域活性化など、群馬県前橋市の先進事例を視察した。

◆行政は「つくる」のではなく「つなぐ」

官民共創スペース「NETSUGEN」

群馬県庁32階にある官民共創スペース「NETSUGEN」は、群馬県が設置し、民間事業者の専門性を活かして運営する施設で、企業、大学、自治体など多様な主体が交流し、新たなビジネスや地域課題の解決につながるプロジェクトを生み出している。

須藤副主幹より概要説明を受けた後、コワーキングスペースや交流エリアなど、洗練されたデザインと工夫が施された施設を見学した。利用者同士がつながるためのイベントや交流の仕掛けづくり、行政と民間をつなぐコーディネート機能など、官民共創を継続的に生み出す運営体制が整えられており、行政は事業を主導するのではなく、多様な主体が挑戦できる環境づくりを担っていた。



◆地域資源を活かし、まちに新たな賑わいを創出 前橋市／前橋デザインコミッション(MDC)



前橋市では、市民や企業が主体となるまちづくりを目指し、「前橋市アーバンデザイン」を策定。行政と民間が将来像を共有し、小さな実践を積み重ねながら地域の活性化を推進している。また、MDCは、前橋市のビジョン「めぶく。」とアーバンデザインを実現する民間主体のまちづくり組織として2019年に設立した。

前橋市の佐藤副主幹からは、アーバンデザイン策定の経緯や行政の役割について、MDCの佐藤ソーシャルデザイナーからはアーバンデザインを具現化した「馬場川通りアーバンデザインプロジェクト」の取組みについて説明を受けた後、馬場川通りをはじめとした街並みを案内いただいた。生糸産業で栄えた歴史やレンガ建築など地域固有の資源を活かしながら、公共空間の再生や民間投資を促すことで、まち全体に新たな賑わいが生まれている様子を体感した。



◆「民主導・官民連携」が支えた前橋再生

株式会社ジンズホールディングス 代表取締役会長 CEO 田中 仁 氏
一般社団法人前橋まちなかエージェンシー 代表理事／株式会社まちの開発舎 代表取締役 橋本 薫 氏

民主導・官民連携による前橋のまちづくりについて、田中氏と橋本氏よりご説明いただいた。人口減少や中心市街地の空洞化といった地方都市共通の課題に対し、行政任せではなく民間が主体となって将来のビジョンを描き、行政や地域住民と連携しながらまちづくりに取り組んできたこれまでの経緯が紹介された。



田中 仁 氏

田中氏は、地域企業有志が利益の一部を拠出し、自主財源でまちづくりを推進する民間組織「太陽の会」の活動を紹介。景観形成や人材育成、企業支援などを継続的に進めるには、政治や行政の枠組みに左右されない長期的な視点が重要であると述べた。また、「最大の価値は Creativity である」とし、地域固有の価値を創出することこそが持続可能な地域づくりにつながると強調した。

橋本氏は、設計事務所を営む傍らボランティアで始めたまちづくりを、持続可能な活動とするために本業へ転換。まちづくりの基盤は施設整備だけでは実現せず、人づくりや組織づくり、行政との対話、地域との信頼関係を積み重ねた先に成り立つものであると語った。

一行からは、地方都市におけるまちづくりの進め方や前橋市が目指す都市像などについて活発な質疑が交わされ、委員会活動はもとより、参加者各々の事業活動にも活かせる多くの学びを得られた。



橋本 薫 氏

◆ホテルを核に、まちの価値を高める

白井屋ホテル

白井屋ホテルは、創業約300年の老舗旅館を再生し、2020年12月に開業したアートデスティネーションである。

一行は、萩原フロントマネージャーの案内で、世界的な建築家やアーティストによる作品が随所に配置された館内を見学した。収益性を優先して客室数を増やすのではなく、あえて客室数を抑え、吹き抜けやアート、緑を取り入れたゆとりある空間価値を創出。「ホテルをつくる」ことが目的ではなく「ホテルを核に人を呼び込み、まち全体を元気にする」という考えが背景にあると説明を受けた。ホテルの枠を超え、地域資源や文化、人をつなぎながらまちの価値を高める取組みに触れ、民間主導で地域全体の価値を高める発想と実践を学んだ。



今回、まちづくりは「誰かがやるもの」ではなく、「地域の当事者が主体となって動くもの」であることを改めて認識するとともに、多くの示唆を得る大変有意義な視察となった。



「AI × 人」が拓くウェルビーイング

— 人財育成・活躍委員会、企業経営委員会、デジタル推進委員会（合同委員会） —

7月13日(月)、第5回人財育成・活躍委員会（西能淳委員長）、第6回企業経営委員会（山田恵子委員長）、第5回デジタル推進委員会（西田美樹委員長）をANAクラウンプラザホテル富山にて合同開催し、委員74名が参加した。開会に先立ち、西田委員長より「人口減少や採用市場の変化とそれらを解決するためのデジタル推進は切り離せない。生成AIを活用したウェルビーイング経営について深く掘り下げたい」と挨拶があった。

第1部講演会では、(株)日立製作所フェロー／(株)ハピネスプラネット代表取締役CEOの矢野和男氏を講師に、「ウェルビーイングな組織が生産性を高める：『生成AI × 人』でここまでできる」と題し、講演いただいた。矢野氏は冒頭、昨今のAIは、複数のAI同士が検証・協力し合う「自律型エージェント」へ進化し、技術的転換点を迎えていると説明。AIは人間の能力を拡張する基盤となり、人間の役割は「指示と価値判断」へとシフトするとした。また、人間は自身の「スキル」と「チャレンジ」が高い次元で均衡し、没頭している状態で幸福を感じ、高いパフォーマンスを発揮すると説明。AIが人間のスキル不足を補完することで、人間は常に「チャレンジ」の領域に留まり続けることが可能になると説いた。講演では、(株)ハピネスプラネットの生成AIサービス「FIRA」も紹介。製造業を営む委員から「宇宙・ロケット分野へ進出したい」というテーマが提示されると、「FIRA」による戦略立案を実演。AIエージェント同士の議論に、参加者は見入っていた。

第2部では、矢野氏と3委員長によるクロス



西田委員長



矢野 和男 氏

トークを実施。生成AIと人間の成長や組織運営、経営者の役割について議論した。西能委員長からは、AIへの依存が人間の思考力の低下や、若手社員の成長機会の損失をも

たらすのではないかと懸念が示されると、矢野氏はAIを「思考を外部化する道具」と捉え、AIに任せられる仕事は任せ、若手にも裁量を与えてAI活用に挑戦する機会を増やすことが重要と語った。

山田委員長からは、経営者が手放してはならない判断や責任、リスク管理と社員の自立性をどう両立するかについて質問がなされた。矢野氏は、AIのリスクを過度に恐れず、まず実態を理解した上で活用することが重要と説明。経営者自身がAIに触れ、挑戦する姿勢を示すことが組織変革の出発点になるとの考えを示した。

最後に矢野氏は、「知ること」はAI、「信じること」は人間の役割とし、決める「信念」と、間違えたときに「責任を取る」ことこそ、人間にしかできない独自の役割であると強調した。今回の合同委員会では、AIを信頼し責任を担う経営者と、それを支えるAIが一体となる、新しい時代のマネジメントについて理解を深める機会となった。



西能委員長



山田委員長



ようこそ、富山経済同友会へ

～ 新会員歓迎オリエンテーション・懇親会 ～

交流委員会（伊東潤一郎委員長）は、8月24日(月)に、令和7年10月以降に入会または交代された新会員を対象としたオリエンテーション・懇親会をオークスカナルパークホテル富山で開催し、新会員55名を含む計77名が参加した。本行事は新会員の方に当会の歴史と活動をより理解していただくとともに、役員との親睦を深める目的で毎年開催している。

オリエンテーションでは、松田代表幹事が歓迎の挨拶を述べた後、「富山経済同友会について」と題して当会のこれまでのあゆみ・活動理念・活動状況等について説明し、最後に



松田代表幹事

「是非この場を社交場として活用し、業界を超えた横のつながりを育み、同友会活動を大いに楽しんでいただきたい」と締めくくった。

続いて、出席した55名の新会員による自己紹介が行われた。スピーチは1人1分という限られた時間ながら、それぞれの事業内容や富山への貢献に向けた熱い想いが凝縮された個性豊か

な時間となった。自己紹介の後は、正副代表幹事と新会員で記念撮影を行った。

懇親会では、麦野代表幹事が「新会員55名のご参加というのは過去最高だと思う。自己紹介では富山を愛して富山をもっと良くしようという熱意が伝わり、富山経済同友会のますますの発展を確信した」と述べ、乾杯した。



麦野代表幹事

終わりに、牧田代表幹事が「人脈を持つということが人生を大きく広げてくれると信じている。経済同友会は企業や組織ではなく個人の資格での参加なので、企業の枠にとらわれることなく自由な活動・自由な意見交換をし、ここでの経験を活かして人生を豊かにしていただきたい」と述べ、懇親会を閉じた。



牧田代表幹事



豊岡市に学ぶ「文化×観光×まちづくり」

文化芸術委員会、地域創生委員会、観光戦略委員会（合同視察）

7月14日(火)～15日(水)、第5回文化芸術委員会（近藤裕世委員長）・第5回地域創生委員会（橋本淳委員長）・第5回観光戦略委員会（酒井郁生委員長）による合同視察を開催し、23名が参加。文化芸術により地域の活力を高め、まちづくりを推進する取組みを学ぶため、兵庫県豊岡市を視察した。

〔7月14日(火)〕

① 出石永楽館

出石永楽館は、明治34年（1901年）に開館した、近畿地方に現存する最古の芝居小屋。地元住民による保存運動を経て平成20年（2008年）に再開館し、現在は歌舞伎公演や地域行事などに活用され、映画『国宝』のロケ地としても注目を集めている。

赤浦毅館長からは、1964年の閉館後も所有者が44年間にわたり建物を守り続け、住民の声をきっかけに再開館した経緯や、歌舞伎、落語、演劇などを通じた交流人口の創出について説明を受けた。また、「文化で腹は膨れないが、心を満たすことが大切」との思いにも触れ、文化が人を惹きつけ、地域の魅力を発信する力となることを学んだ。



② 出石家老屋敷、出石城跡



出石家老屋敷や出石城跡では、いずし観光ガイドの小川明子氏から、出石城の築城や城下町の形成、辰鼓楼、大名行列など、出石の歴史や伝統文化について説明を受けた。また、人口減少が進む中、「心を満たす」文化を大切に、交流人口を増やすことで、地域の文化や暮らしを次世代につないでいくとの考えについても話を伺った。地域に根付く文化を守り、次世代へつなごうと活動する姿勢に触れ、地域文化を未来へ継承していくことの意義について考える機会となった。

③ 豊岡市役所

豊岡市の深さをもった演劇のまちづくり推進コーディネーターの田口幹也氏から、文化芸術を地域の基盤として位置付け、地域固有の価値を磨き上げることで「選ばれるまち」を実現する豊岡市の取組みについて話を伺った。「本と温泉」による城崎温泉のリブランディングや城崎国際アートセンター、豊岡演劇祭、芸術文化観光専門職大学など、文化芸術を軸に地域のさまざまな取組みを展開し、まちづくりを進めてきた豊岡市の歩みについて理解を深めるとともに、「まちづくりはOS、まちおこしはアプリケーション」という言葉に象徴される、文化芸術をまちづくりの基盤として捉え、観光や教育、産業など幅広い分野へ展開していく豊岡市の考え方に触れ、文化芸術を生かした地域づくりについて考える機会となった。



④ 豊岡観光イノベーション



豊岡観光イノベーションは、平成28年（2016年）に設立された「豊岡版DMO」として、官民連携による観光地域づくりを進める組織。マーケティングデータの活用や「Visit Kinosaki」の運営、着地型ツアーの企画・販売などを通じ、地域の「稼ぐ力」を高めている。

経営企画グループ長の佐野祥子氏からは、人口減少への対応を背景とした観光戦略について説明を受け、コウノトリや城崎温泉などの地域資源を生かした取組みや、海外への情報発信、体験プランの造成、食の多様性へ

の対応などが紹介された。観光客の地域偏在や人手不足といった課題への対応についても話を伺い、データの活用と地域との信頼関係の両面から観光地域づくりを進める取組みを学んだ。

[7月15日(水)]

⑤ 芸術文化観光専門職大学

芸術文化観光専門職大学は、2021年に兵庫県豊岡市に開学した、芸術文化と観光を学ぶ公立の専門職大学。800時間に及ぶ実習や少人数教育を特徴とし、実社会での課題解決を通じた実践的な人材育成に取り組んでいる。

今回の視察は、昨年7月の定例会で平田オリザ学長からご講演いただいたことをきっかけに実現した。平田学長自ら学内を案内していただき、プロ仕様の設備を備えた実習環境や学生が主体的に学ぶ姿に触れながら、大学の設立経緯や教育、地域との関わりについて話を伺った。学生と教職員約400人による直接的



平田 オリザ 学長



な消費だけで年間約5億円の経済波及効果を生み出しているほか、「オンセンジャー」の演出改善など、学生が地域に溶け込み、新たな視点や価値を生み出している事例も紹介された。大学が若者を呼び込み、地域に新たな活力をもたらししていることに加え、文化芸術と観光を掛け合わせた「文化観光」による地域活性化についても話を伺い、大学と地域が共に成長していく可能性を感じる有意義な視察となった。



⑥ 城崎国際アートセンター (KIAC)

城崎国際アートセンターは、2014年に旧兵庫県城崎大会議館を改修して開設された、舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンス施設。国内外のアーティストが滞在し、作品を創作する「稽古場」として活用されている。

志賀玲子館長からは、城崎には志賀直哉をはじめとする文豪が滞在し創作してきた歴史があり、「外からの表現者を受け入れる」文化が根付いていることについて説明を受けた。また、滞在アーティストが地域の歴史や文化、日常の風景などをリサーチし、住民も気づかなかった地域の価値を作品として国内外へ発信していることが紹介され、文化芸術を通じて地域の魅力や誇りを再発見する取組みについて理解を深めた。



⑦ 城崎温泉観光協会



高宮 浩之 会長

城崎温泉は、約1,400年の歴史を持つ温泉地で、「駅を玄関、道を廊下、旅館を客室、外湯を大浴場」というコンセプトにより、町全体を一つの旅館として運営する「共存共栄」の理念を大切にしている。旅館や商店だけでなく、地域のさまざまな業種が一体となって祭りや行事を支え、温泉街全体の価値を高めている。

城崎温泉観光協会の高宮浩之会長からは、伝統的な風情を守りながら、時代に合わせて地域経営を進化させてきた取組みについて説明を受けた。日本ならではの文化や情緒をありのまま提供するインバウンド戦略や、宿泊データを活用したレベニューマネジメントなど、DXを通じて地域の「稼ぐ力」を高める取組みが紹介された。さらに、AIにも選ばれる地域を目指す仕組みづくりについても話を伺い、伝統と新たな技術を生かした持続可能なまちづくりについて考える機会となった。



産学官で共創する次世代教育を考える ～ とやま教育共創フォーラム ～

8月5日(水)、オークスカナルパークホテル富山において、教育を考える委員会（寺島雅峰委員長）がとやま教育共創フォーラムを開催。委員等会員25名、教育関係者36名の計61名が参加した。



牧田代表幹事

フォーラムの開会にあたり、牧田代表幹事が挨拶し、産学官がそれぞれの立場にとどまるのではなく、相手の立場や気持ちを思いやる「心」を持って向き合うことが、真の共創につながると述べた。特に、参加者同士が相手にもそれぞれの思いや考えがあることを念頭に対話し、知恵を出し合うことへの期待を示した。続いて寺島委員長から開催趣旨を説明するとともに、教育と地域を一体的に捉え、新たな挑戦を続ける井上博成氏を講師として招いた経緯を説明。また、本フォーラムは明確な答えを求め



寺島委員長



井上 博成 氏

まず第1部では、学校法人 CoIU 理事長の井上 博成氏が「Co-Innovation Valley について～大学設立から起業、事業承継まで～」と題し、基調講演を行った。井上氏は、大学在学中に東日本大震災を経験したことを契機に地域経営や地域自治に関心を持ち、欧州でエネルギーや林業、地域社会と大学の関係性を示すソーシャルイノベーションについて研究。帰郷後は、高山市の産業構造に課題を感じ、地域資源を生かした事業に取り組む中で、地域を変える人材育成の必要性を感じ、大学設立に至った経緯を紹介した。

次に、2026年春に開学した CoIU の教育理念と特徴について説明。同大学では、自ら「問いを立てる力」と、多様な人と協働して新たな価値を生み出す「共創力」の育成を重視し、「理論・実践・対話」を軸に、地域を学びのフィールドとした実践的な教育に取り組んでいると説明した。また、全国各地の企業や地域で学ぶ機会を設け、多様な価値観に触れながら視野を広げる仕組みについても紹介した。

最後に、幼少期から社会人までをつなぐ「教育エコシステム」の構想を紹介。地域そのものを学びの場とし、教育と地域の実践を循環させることで、自ら問いを立て、未来を共創する人材を育てる考えを示した。また、「5つの時間軸」で捉えるウェルビーイングの考え方にも触れ、人と社会、地球環境との調和を含めた豊かさを追求することの重要性を語った。こうした井上氏の実践と理念は、本フォーラムが掲げる「教育共創」の意義を考える上で、貴重な示唆を得る機会となった。

次に、第2部では、「未来に出現する共創の教育：現場からの挑戦と産業界の視点」をテーマにパネルディスカッションを実施した。

ディスカッションに先立ち、ファシリテーターの寺島委員長から、会員企業を対象に実施した「産学官連携による学校教育に関する調査」の結果を報告。企業が学生に求める資質・能力や学校との連携における課題を示し、企業が早期から教育に関わり、実践の場を提供することの重要性を指摘した。



その後、調査結果を踏まえ、井上博成氏、林誠一氏（富山大学学長特命補佐、元富山県立砺波高等学校校長）、土屋誠氏（日本海ガス株式会社取締役会長、富山経済同友会前教育問題委員会委員長）、横川秀仁氏（富山県教育委員会教育みらい室県立高校課高校教育担当主幹）が、学校・大学・企業・行政それぞれの立場から、これからの教育と地域のあり方について議論を交わした。

井上氏は、異なる主体がつながり新たな価値を生み出す「Co-Innovation」や、対話を通じて「問い」を深める学びの重要性を指摘。林氏は「探究」と「地域とのつながり」の重要性と、学校と企業の距離が近い富山の強みを生かした教育共創の可能性を示した。土屋氏は、企業が多様な価値観や実践に触れる機会を提供し、専門性を生かして教育に伴走することを提言。横川氏は、学校が従来の慣習を見直す「引き算」の発想と、異なる立場との「共創」＝「かけ算」の必要性を説いた。多様な立場から意見を交わし、地域全体で人を育てる教育のあり方について考える機会となった。



横川 秀仁 氏



土屋 誠 氏



林 誠一 氏



井上 博成 氏

続いて第3部では、教育関係者、企業関係者などが立場を越えて対話するため、グループディスカッションを実施。学校と産業界が抱える共通の課題や、教育共創に向けて明日からできることについて議論した。各グループからは、探究学習と入試制度の両立、企業と学校をつなぐコーディネーターの必要性、単発ではなく継続的に企業が教育に関わる「伴走」の仕組みなど、さまざまな課題が挙げられた。また、子どもたちの地域への愛着を育むには、学校だけでなく保護者を含む大人の意識を変えていくことが重要との意見も出され、まずは企業や地域と「つながる」ことや、自ら電話をかけてみるといった具体的な一歩の大切さが共有された。



最後に林氏が、教育改革は「大人の意識改革」でもあると総括。学校は問いを立てる学び、大学は学校と企業をつなぐハブ、企業は実践の場を提供するという、それぞれの役割を示した上で、議論を理論だけで終わらせず、職場や学校、家庭など身近なところから行動に移すことが、富山の教育と地域を変えていく一歩になると呼びかけた。



石坂担当役員

最後に、本フォーラムの閉会にあたり、教育を考える委員会の石坂担当役員が挨拶。参加者が「共創」をテーマに多様な立場から意見を交わした意義を振り返った。少子化や生成 AI の進展を踏まえ、従来の知識・記憶重視の教育からの転換と、子どもたちが地域や社会と接点を持つことの重要性を指摘。今回の議論を今後の提言につなげ、富山の教育のより良い変化に向けて活動が続けていく決意を述べ、約3時間半にわたるフォーラムを締めくくった。



林 誠一 氏

閉会後にはBLUE CAFE ORIENTALにて情報交換会を開催。フォーラムに引き続き参加者同士が所属や業種の垣根を越えて意見を交わし、交流を深めるなど、終始和やかで活発な懇談の場となった。



— 課外授業講師派遣 —

第6回 富山県立新湊高等学校

7月8日(水)、碓井一平氏(株)就活ラジオ代表取締役)がクロスベイ新湊において、これから探求活動をはじめ新湊高等学校1年生を前に「「気になる」を「やってみよう」に変える探究の始め方」と題して課外授業を行った。

碓井代表は冒頭、生徒たちに、探究活動の「テーマ」という小さな種と、「今週動き出す一歩」を持ち帰ってほしいと呼びかけた。そして、探究活動の本質は、明確な答えのない問いに対し、どのように考え、行動するかというプロセスを学ぶことにありと説明。「成績向上」や「実現性」にとらわれず、自身が気になったことを出発点に、まず踏み出すことが重要だと語った。また、企業の新たなサービスづくりも、身近な課題やニーズを見つけ、試行錯誤しながら形にしていくなかで探究学習と共通すると、自身の起業経験を交えて説明した。

続いて、物事の本質を見極める大切さについて、「廊下に時計が欲しい」という要望を例に説明した。本当に必要なのは時計ではなく「時間を知りたい」という目的であり、「どうすれ

ば時間を把握できるか」という問いに変えることで、チャイム前の予告音など、さまざまな解決策が見えてくると語った。要望をそのまま受け取るのではなく、背景にある本質を捉え、問いを深めることの重要性を示した。

さらに、考え続けるだけでは答えは見つからないとして、悩む時間が「考えている風」になってしまうこともあると指摘。まずは5人にアンケートを取るなど、1週間以内にできる「小さな行動」を起こし、その結果をもとに仮説を検証し、再び考えるサイクルを回すことが探究には重要だと語った。

最後に、「発表のデザインの綺麗さではなく、そこに至るまでに何をやったかという中身に最大限コミットしてほしい。今日ワークができた皆さんには、すでに探究を進める能力がある」と生徒たちにエールを送り、講演を締めくくった。



碓井 一平 氏

第7回 富山県立高岡高等学校

7月9日(木)、福崎秀樹氏(株)フクール代表取締役)が富山県立高岡高等学校にて探究科学科の1年生78名を前に「AI時代を生きるチカラを考える」と題して課外授業を行った。



福崎 秀樹 氏

福崎代表はまず、(株)フクールのビジョンを紹介し、「働く」とは「傍を楽にする」ことであり、周囲の人を思いやり、一人ひとりが成長し、みんな幸せになることを大切にしていると語った。

次に、全国の幸福度ランキングで、富山県は客観的な指標では上位である一方、主観的な幸福感では最下位であることを例に、「条件が揃っていても幸せを感じるには限らない」と指摘。他人の正解に合わせるのではなく、自らの心を起点に考え、行動する「積極的自由」の重要性を説いた。また、生成AIの進化に触れ、今後は「言われたことを正確にやる」だけでなく、「自

ら問いを立て、判断し、行動する力」に価値が移ると強調。好奇心と柔軟性を持ち、「意図的練習」を重ねることが重要だと語った。

さらに、AI時代だからこそ「人を思いやる強さ」や「人を信じる力」といった人間力が大切だとし、仲間との関わりやさまざまな経験を通じて、「自分の幹や根っこ」を育ててほしいと語った。

講演後の質疑では、社長業を通じて最も成長したことを問われ、「人を信じる力」と即答。また、大学進学への不安を訴える生徒には、「ここで人生が決まることは絶対はない」と自身の経験を交えて激励し、進路は条件や想定されたルートではなく、「こんな大人になりたい」と思えるロールモデルを基準に考えてほしいと伝えた。

その後の座談会では、進路や起業、AI・データサイエンスなどについて活発な対話が行われた。夏休みの過ごし方について、福崎代表は「旅」「人」「本」が人を成長させると紹介。知らない場所へ出かけたり、本を読んだり、友人と過ごしたりする中で、今しかできない経験を重ねてほしいと語った。

7月15日(水)、藤井喜大氏(株ネクストリー代表取締役)、山野昌道氏(株チューリップテレビ取締役会長)、下村貴之氏(東京海上日動火災保険(株)富山支店長)、清澤聡氏(コーセル(株)取締役常務執行役員)、尾田拓海氏(株マインビ富山支社長兼石川支社長)の5氏が富山県立富山いすみ高等学校で開催された「企業招へい講座」において、1学年160名に対し課外授業を行った。

藤井代表は、“強み”をテーマに、自分の強みの見つけ方や将来への活かし方について講演を行った。冒頭、バスケットボールでの挫折経験を振り返り、「思い通りにはいかないが、やった通りにはなる」と語り、思い通りにならない時こそ、置かれた状況の中でできることに全力で取り組むことが大切だと説いた。また、挫折の数だけ新たな強みに出会えたとし、挑戦し続けることの大切さを伝えた。

続いて、今年4月に入社した盛田氏が、4年間の小学校教員生活を経て転職した経験を紹介。高校生の時にはやりたいことが決まっていなかったが、教員としての経験を通じて培った「課題に向き合う力」「人に寄り添う力」などが現在の仕事にも活かされていると語り、「今、やりたいことや自分の強みが分からなくても、大丈夫」と伝えた。



さらに藤井代

表は、強みとは特別な才能ではなく、自分では当たり前すぎて気づいていない、日頃から自然にできていることだと説明。友達の話聞く、ノートをきれいに書くといった身近な行動にも、強みが隠れていると紹介した。



藤井 喜大 氏

また、強みを生かすことで周囲と協力し、成果を上げられるほか、喜ばれたり感謝されたりすることで、自己肯定感が高まり、取り組むことが楽しくなるという好循環についても語った。

最後に、強みの見つけ方として、①周囲の人に聞く、②好きなことを動詞で考える、③実際に試す、④複数の強みを組み合わせる、という4つのステップを紹介。特に、異なる強みを掛け合わせることで、「唯一無二の強み」や新たな価値を生み出せると説明し、普段「当たり前」と思っている小さな力を大切に、自分らしい強みを見つけ、磨くことを呼びかけた。

山野会長は、「人生を幸せにする3つのコツ」をテーマに、夢の見つけ方や人生の歩き方について講演した。冒頭、自身の経歴を振り返り、スポーツや音楽、さまざまな仕事に挑戦してきた歩みを紹介。その上で、やりたいことや自分に向いている仕事は、実際に経験してみなければ分からないとし、「働いたこともないのだから、自分が何に向いているのか分からなくて当然」と語った。目の前のことに一生懸命取り組み、考え、行動する中で、夢や進む道が見えてくると呼びかけた。

続いて、44歳の時にバンドコンテストに応募し、全国大会に出場した経験を紹介。「応募したからこそ、楽しい思い出が生まれた」と振り返り、「一歩踏み出せば、見える景色が変わる」と、挑戦することで新たな経験や出会いが生まれることを伝えた。さらに、



さらに、

山野家の家訓「迷ったらやる」を紹介し、やって後悔するより、やらなかったことを後悔する方が大きいと、行動することの大切さを力強く訴えた。

さらに、人生を幸せにする3つのコツとして、



山野 昌道 氏

「迷ったらやる」「人のせいにしない」「何をやってもうまくいくと考える」を挙げた。加えて、夢や目標に向かって努力できること、人のために生きられること、家族が仲良く暮らせることを幸せな人生の姿として示し、努力の先にある達成感や、周囲への感謝と思いやりの大切さを説いた。

最後に、「未来は一日一日の積み重ね」と述べ、高校時代に一生の友達をつくり、勉強、スポーツ、芸術など何事にも一生懸命取り組んでほしいと呼びかけた。「私じゃなくて皆さんが持っているものは『可能性』」と力強く語りかけ、失敗を恐れず、一日一日を大切に過ごしてほしいとメッセージを送った。

下村支店長は、「グローバル社会で求められる人材」をテーマに、これまでの経験を踏まえ、将来の進路選択や社会で活躍するために必要な力について語った。冒頭、東京海上日動火災保険株式会社の事業について紹介し、保険は人々の暮らしや企業活動、社会のさまざまな挑戦を支える役割を担っていると説明した。

続いて、国内営業や人事、海外勤務など、さまざまな仕事を経験してきたこれまでのキャリアを紹介。進路に迷った高校・大学時代についても触れながら、「キャリアは点の連続」と表現した。一見つながりのない経験でも、後から振り返れば点と点がつながり、無駄になることはない。そして、将来について最初から完璧な選択をする必要はなく、まずは目の前のことに真摯に取り組むことが大切だと伝えた。



その上で、グローバル社会で求められる力として、「行動力」「前向き力」「つながる力」の三つを挙げた。行

動力については、小さな一歩を踏み出し、継続することの大切さを説明。前向き力では、「向き不向きより、前向き」という言葉を紹介し、失敗や困難も前向きに取り組むことで成長につながると



下村 貴之 氏

語った。また、つながる力については、社会は一人では成り立たないとし、挨拶や丁寧に人の話を聞くこと、感謝の言葉を伝えることなど、日頃の行動の積み重ねが信頼を築くことにつながると強調した。

さらに、語学力は重要なツールである一方、それ以上に三つの力が重要であると指摘した。これらの力をベースに、「情報を集め、自ら考え、発信・行動すること」が、国内外どこで働くかを問わず重要であり、身に付けることで、より楽しく人生を歩むことにもつながると語った。最後に、スティーブ・ジョブズの言葉「Stay Hungry. Stay Foolish.」を贈り、講演を締めくくった。

清澤常務は、品質管理（QC）の視点や、社会で求められる問題解決の思考プロセスについて講演を行った。冒頭、コーセル株式会社の事業内容に触れるとともに、経営理念である「品質至上を核に社会の信頼に応える」について説明した。「品質」とは製品だけでなく、人やサービスなど、仕事に関わるあらゆる「質」を指すと解説。顧客の多様なニーズに応える難しさに触れながらも、より良い製品を世に送り出し、産業界を豊かにしたいとの思いを語り、社員一人ひとりが「仕事の質」を高め、改善することの重要性を強調した。

「品質」への考え方を踏まえ、仕事や日常生活にも生かせる「QC的なものの見方・考え方」として、①品質最優先、②後工程はお客様、③



PDCAを回し続ける、④事実に基づいて判断する、⑤重点思考で効率的に取り組む、⑥問題の根源を仕事の

プロセスに求める、という六つの視点を示した。特に、ミスが発生した際には個人ではなく、仕事の進め方や仕組みに目を向け、プロセスそのものを改善することが重要だと説いた。また、こうした考え方を実践するQCサークル活動を製造部門だけでなく、総務、経理、営業、開発など全社で行っていると説明した。



清澤 聡 氏

最後に、最も伝えたいメッセージとして「問題から逃げないこと」を挙げ、人生では逃げたくなる問題に直面することもあるが、逃げても形を変えて同じ問題が起こるため、向き合い、解決していく姿勢が大切だと強調した。自身の経験を振り返り、目の前の仕事に一生懸命取り組む中で新たな機会や可能性が生まれ、未来につながっていく「ブランド・ハプンスタンス」の考え方にも触れ、その時々役割に真摯に向き合い、挑戦を続けることの大切さを語り、講演を締めくくった。

尾田支社長は、「ふるさとを外から見てみよう」と題し、富山の魅力や可能性について語った。富山で生まれ育った人には「当たり前」に感じられることも、外から見ると大きな魅力になると指摘。生徒に富山の魅力を問いかけながら、富山駅前で水道水を自由に飲めることや、夜に安心して街を歩き、公共交通で帰宅できる環境などを例に、富山ならではの暮らしやすさを紹介した。

また、同校卒業生の大石氏は、東京の大学を卒業後、首都圏で働いた経験を経て、「いつか富山に帰りたい」という思いから昨年Uターンした自身の経験を紹介。東京と比べ、富山では広くゆとりのある住環境や、自然、家族との時間を身近に持てることなど、県外で暮らして実感した魅力を語った。



さらに尾田支社長は、持ち家率74.3%（全国3位）、通勤時間30分未満の割合が約7割であ

ることなどを示し、富山には住環境や時間のゆとりがあると説明。医薬品やアルミ、ガラス、銅製品、半導体製造装置など、世界の産業を支える多様なものづくり企業が集積していることにも触れ、「富山には実は日本や世界を支える産業がある」と強調した。



尾田 拓海 氏

続けて、県外へ進学することを否定するのではなく、「外に出るからこそ、富山の良さや課題が見えてくる」と語り、広い視野を持つことの大切さを伝えた。進路を考える際には、親や先生だけでなく、多様な大人の話を聞くことも勧めた。

最後に、富山の魅力には、ものづくりの熱量や成長への期待という「仕事・産業」のA面と、豊かな自然の中でのびのびと働き、ゆっくり休める「暮らし」のB面があると説明。「皆さんにとっての、富山の良さは何か」と問いかけ、ふるさとを外から見つめ直す大切さを伝えた。

「社長として常に思っていること」

小・中・県立学校 3 年次校長研修会にて講演

7月30日(木)、山田仁史氏（日本海建興株式会社代表取締役社長）が小・中・県立学校3年次校長研修会（富山県教育委員会主催）において、3年目校長33名を対象に講演を行った。

山田代表は、社長就任後に進めてきた組織改革や人材育成の取り組みを中心に、地域との関わりについて語った。社員の声を生かした組織づくりや、次世代を担う人材の育成について、具体的な事例を交えながら紹介した。

山田代表は、経営において何よりも大切なのは「人」とであると強調し、社員だけでなく協力会社も含めた人材の確保と育成が重要であると説明した。そのため、若手社員との懇談会を重ね、そこで出された意見を会社の制度や職場環境の改善につなげているという。沖縄への社員旅行や有給休暇の積立制度、新しい作業服の導入など、若手社員の声から実現した取り組みを紹介した。また、各現場に分散して働く社員の一体感を高めるため、社長からのメッセージや社員紹介などを掲載した社内報を発行していることにも触れた。

次世代を担う人材の育成については、若手幹

部を積極的に登用するとともに、経営会議への参加や「中期課題」を通じ

て、会社の将来を自ら考え、行動する機会を設けていると説明した。「中期課題」では、目先の数値や成果だけを追うのではなく、3年先を見据えて会社の成長のために何ができるかを考えさせることで、次世代の経営を担う人材としての視座を育てていると述べた。

また、「地域を支え、地域と共に発展する」というビジョンのもと、社員が家族とともに富山で豊かに暮らせる会社を目指していると述べ、小水力発電や事業承継、女性が働きやすい現場環境の整備など、地域の将来を見据えた取り組みを紹介した。最後に、富山には若者が自己実現できる魅力が十分にあるとし、経営者自身も意識を変え、学校や教育関係者と連携しながら、「富山の子どもは富山で育てる」という思いで、地域の人材育成に貢献していきたいと締めくくった。



山田 仁史 氏

中堅教員へのメッセージ

— 富山市中堅教諭等資質向上研修 —

7月28日(火)、青山和也氏(株エクシーズ代表取締役)、尾山謙二郎氏(マンパワーセキュリティー(株)代表取締役)が、中堅教諭等資質向上研修「社会に学ぶ研修会2」(富山市教育センター主催)において、採用から11年目を迎えた富山市内の小・中・義務教育学校の中堅教員62名を対象にオンラインで講演を行った。



青山 和也 氏

青山代表は、長年携わってきたIT業界の視点から、現代社会における「価値」と「豊かさ」の本質について語った。ITやDXの進展により、買い物や情報収集など、さまざまなことが早く、正確で便利になった一方で、「便利さは、本当に心の豊かさにつながっているのか」と受講者に問いを投げかけた。

また、価値を「機能的価値」と「情緒的価値」の二つに分類した。「機能的価値」は、効率や正確さなど、結果として分かりやすく表れる価値であり、今後AIに代替される可能性が高い一方、「情緒的価値」は、安心や信頼、共に悩み、考えることなど、人だからこそ生み出せる価値であると強調した。(株)エクシーズの理念「ITの力で人に優しい未来を共に築く」には、単なるツールを提供するのではなく、相手に寄り添い、共に考える誠

実さを大切にしたいという思いが込められていると語った。

さらに、「過程(プロセス)」の重要性にも言及。効率化によって最短距離でゴールにたどり着くことができる一方、その過程で失われるものにも目を向ける必要がある。車で移動すれば見過ごしてしまう道端の草花や、歩くことで生まれる人との何気ない交流を例に挙げ、一見すると遠回りに思える行動の中にも、新たな気づきや学び、偶然の出会いが生まれると説明。省くべき無駄と、気づきや工夫、信頼が生まれる「残すべき過程」を見極めることが、豊かさを守る鍵になると強調した。

最後に青山代表は、真の豊かさとは、単に便利なものを手に入れることではなく、自ら考え、試行錯誤し、誰かの役に立ったという「実感」の中にあると受講者に伝えた。AIが急速に普及するこれからの時代だからこそ、効率だけを追い求めるのではなく、失敗も含めた過程を大切に、人だからこそ生み出せる情緒的価値を育むことが重要であると語り、講演を締めくくった。



尾山 謙二郎 氏

尾山代表は、冒頭、自身の波乱万丈な半生を振り返りながら、現代社会の課題と教育の本質について語った。20代で多額の負債を抱えながらも会社を再興させた経験から、失敗してもやり直せる社会であるべきだと述べ、学校もまた、子どもたちが失敗を重ねながら成長していく場であってほしいと受講者に語った。

後半は、「中堅の立場になって思っていること、悩んでいること」をテーマに、尾山代表と受講者との対話が行われた。さまざまな悩みをめぐる意見交換を通じて、周囲の「空気」に支配されるのではなく、自らの信念や大義を持って生きることの大切さが語られた。尾山代表は、現代の「働き方改革」や「ハラスメント」への過度な反応が、意欲ある人の成長や人と人との深い関係を阻害しているのではないかと問題提起した。働くことは生きることそのものであり、若いうちに基礎を固

めるための苦労も必要であると語った。また、ハラスメントを恐れて「腫れ物に触る」ように接するのではなく、言葉を正しく捉え、自らの考えを持つことで、本質的な信頼関係を築くことが大切であると説いた。

受講者からの「正しいと思うことを貫きたいが、周囲との調和も大切にしたい」という悩みに対しては、自分の中に確かな「大義」を持つこと、正しいことを伝える際には相手を傷つける「刃」にもなり得ることを自覚し、言葉を選ぶこと、そして一人で抱え込まず仲間をつくることが重要であると助言した。また、過去の後悔や未来への不安にとらわれず、「今、この瞬間」にできることに集中することが、困難を乗り越え挑戦を続ける力になると語った。

最後に、教育現場で悩む中堅教員に対し、「大義」を深めることの重要性を訴えた。「教育を間違えれば国家を殺す」という言葉を引用し、教師は国の未来を左右する尊い使命を担う仕事であると強調。周囲の空気に流されることなく、自らの信念や原点に立ち返り、子どもたちが憧れるような佇まいで教育に邁進してほしいと、熱いエールを送って講演を締めくくった。

活動報告

7月1日～8月31日

○定例会等

開催日時・場所	内 容	出席者
7月27日(月) ホテルグランテラス 富山	7月幹事会	41名
7月27日(月) ホテルグランテラス 富山	7月会員定例会（教育を考える委員会主管） 講師：共愛学園前橋国際大学 学長 大森 昭生 氏 演題：「Community Based University をめざして ～共愛学園前橋国際大学の地学一体の学びを中心に～」	約100名

○委員会

開催日時・場所	委員会名	内 容	出席者
7月2日(木) 11:30～13:00 事務局会議室	文化芸術委員会 第7回正副委員長会議	・第5回委員会（豊岡合同視察） ・第6回委員会（県内視察）	5名
7月3日(金) 群馬県前橋市	第4回地域創生委員会	「民主導・官サポート」型により地域活性化を図る先進地の取組みを学ぶ 視察・面談先： ・官民共創スペース「NETSUGEN」 ・前橋市 ・前橋デザインコミッション(MDC) ・白井屋ホテル ・(株)ジンズホールディングス 代表取締役会長 CEO 田中 仁 氏 ・(一社)前橋まちなかエージェンシー 代表理事／(株)まちの開発舎 代表取締役 橋本 薫 氏 他	27名
7月13日(月) 17:00～20:40 ANA クラウンプラザ ホテル富山	第5回人財育成・活躍委員会 第6回企業経営委員会 第5回デジタル推進委員会 (合同開催)	・講演会 講師：(株)日立製作所 フェロー / (株)ハピネスプラネット 代表取締役 CEO 矢野 和男 氏 演題：「ウェルビーイングな組織が生産性を高める：『生成 AI × 人』でここまでできる」 ・クロストーク 登壇者：矢野 和男 氏 西能 淳 氏 (人財育成・活躍委員長) 山田 恵子 氏 (企業経営委員長) 西田 美樹 氏 (デジタル推進委員長)	74名

開催日時・場所	委員会名	内 容	出席者
7月14日(火) ～15日(水) 兵庫県豊岡市	第5回文化芸術委員会 第5回地域創生委員会 第5回観光戦略委員会 (合同県外視察)	文化芸術により地域の活力を高め、まちづくりを推進する豊岡市の取り組みを学ぶ 視察先： ・芸術文化観光専門職大学 ・出石永楽館 ・城崎国際アートセンター 他	23名
7月21日(火) 11:30～13:00 事務局会議室	教育を考える委員会 第6回正副委員長会議	・とやま教育共創フォーラム(8/5)について	6名
8月5日(水) 14:00～20:00 オークスカナルパーク ホテル富山	とやま教育共創 フォーラム	・講演会 演題:「Co-Innovation Valley について～大学設立から起業、事業承継まで～」 講師:学校法人CoIU 理事長 井上 博成 氏 ・パネルディスカッション テーマ:「富山で実現する『共創』の教育―現場からの挑戦と産業界の視点」 パネリスト: 井上 博成 氏 林 誠一 氏 (富山大学 学長特命補佐) 土屋 誠 氏 (日本海ガス(株) 取締役会長) 横川 秀仁 氏 (富山県教育委員会 教育みらい室 県立高校課高校教育担当主幹) ・グループディスカッション テーマ:「わたしたちの教育現場・企業で『共創』をどう実装するか」	61名
8月6日(木) 17:00～19:50 日本料理 海風亭	第8回交流委員会	・会員エンゲージメントヒアリング (会員満足度調査)について	7名
8月18日(火) 11:00～13:00 事務局会議室	人財育成・活躍委員会 第4回正副委員長会議	・今年度活動計画について ・KATARAI CAFEについて ・今年度のスケッチオーデションの対応について ・3月会員定例会について ・その他	4名
8月25日(火) 17:00～20:00	地域創生委員会 第13回正副委員長会議	視察先 ・アスモ (ジソウラボ概要説明) ・井波まち歩き 会議 (NOMI) ・今後の予定について ・その他	12名

○課外授業講師派遣

開催日時	学 校	対 象	講師・演題
7月8日(水)	富山県立新湊高等学校	1学年 127名	碓井 一平 氏
7月9日(木)	富山県立高岡高等学校	1学年 78名	福崎 秀樹 氏
7月15日(水)	富山県立富山いずみ高等学校	1学年 160名	尾田 拓海 氏
			清澤 聡 氏
			下村 貴之 氏
			藤井 喜大 氏
			山野 昌道 氏
7月28日(火)	富山市中堅教諭等資質向上研修	富山市内小・中・義務 教育学校11年次教員62名	青山 和也 氏
			尾山 謙二郎 氏
7月30日(木)	小・中・県立学校3年次校長研修会	小・中・県立学校 3年次校長 33名	山田 仁史 氏
8月20日(木)	高等学校等事務職員研修	富山県公立小中学校事務職員 富山県立学校事務職員 約160名	牧田 和樹 氏
8月21日(金)	富山県立富山北部高等学校	1学年 238名	市森 友明 氏
			藤井 喜大 氏
			大橋 聡司 氏
			東澤 善樹 氏
8月26日(水)	富山県立砺波高等学校	1学年 28名	野村 充 氏

○同友会諸会合

開催日	内 容	場 所	出席者
7月8日(水)	第2回日本海沿岸地域経済同友会サミット 富山大会	A N A クラウン プラザホテル富山	正副代表幹事 棚田日本海サミット 委員会委員長
7月9日(木)	群馬経済同友会 創立70周年記念式典	群馬県高崎市	牧田代表幹事

○その他の会合

開催日	内 容	場 所	出席者
7月9日(木)	第1回第4次富山県観光振興戦略プラン 策定会議	富山県民会館	麦野代表幹事
8月19日(水)	T-Startup2026審査会	オンライン	麦野代表幹事
8月19日(水)	富山県との意見交換会	富山電気ビル ディング	正副代表幹事
8月21日(金)	第3回富山市総合計画審議会 「活力・交流部会」	富山市役所	麦野代表幹事
8月24日(月)	新会員歓迎オリエンテーション	オークスカナル パークホテル富山	77名



「生涯現役」を新常識にする

矢澤 剛 志

(アルコット株式会社 代表取締役社長)

不躰な問いから失礼します。「常識」の反対は何でしょうか。AIによると、直接的な対義語は「非常識」のようです。文脈によっては「世間の常識にとらわれない新しい発想」という意味で、非常識がポジティブな意味で使われることもあるとのこと。

最近のAIは優秀ですね?! 矢澤の考えとしては、少なくともビジネスの領域においては、常識の反対は「非常識」ではなく「新常識」ではないかと。

例えば「物やサービス」に対して、売り手側は高く売りたい、買い手側は安く買いたいという心理が発生します。しかし、上位概念やニーズに視点や論点を移すことで、お互いの「共通目標」や「利害の一致ポイント」を見出すことができれば、その常識は大きく変わります。本来は代金を受け取るはずの売り手側がお金を支払ってでも提供したいと考え、買い手側がお金を受け取って受領するという、一見逆転したような現象さえ起こり得ます。何を言っているのかと思われるかもしれませんが、これが新常識の一例です。具体事例は別の機会でお話するとして、この新常識の発想こそがビジネスにおける「勝ち(価値)パターンへの近道」だと考えます。

では、「生涯現役」を新常識にするとはどういうことか。

日本は人口減少と少子高齢化が加速度的に進み、労働人口減少による深刻な人手不足に加え、「社会保障費の増大と財源不足」という大きな課題を抱えています。この深刻な課題を解決する鍵のひとつが「生涯現役」で働き続けることです。アルコットでは、2024年より段階的定年制を導入しました。第一定年を70歳とし、第二

定年を75歳、第三定年を80歳、第四定年、第五定年と、一部の業務を除いて最長90歳まで働くことができる制度です。単に雇用を延長するだけでは、働く人にとっても企業にとっても持続可能とは言えません。そのためアルコットでは、次の3つを雇用延長の条件にしました。①健康であること②安全に働けること③経営理念に基づいて働けること。健康面は健康診断で確認できますが、安全面は今まで客観的な指標がありませんでした。そこで今年2月よりAI体力測定アプリを導入し、安全面と相関関係が高いと思われる身体機能や認知機能をデータとして可視化できるようにしました。また、歳を重ねるほど、最大の報酬はお金よりも「ありがとう」と言われる喜びであることがアルコットでわかりました。このことは、アルコットの経営理念の一部でもある物心両面の幸せの実現につながります。健康で安全に働く方が増えると、医療機関や介護施設のお世話になる可能性を低減することができ、「社会保障費の抑制」につながります。そして、働いて得たお金を地域で使うことにより「地域経済の活性化」にもつながります。つまりは、マイナスが減ってプラスが増えるわけです。世界最長寿国の日本でこのモデルが実現できれば、これから日本同様の道をたどられると思われる中国、ドイツ、イタリア等にも展開できる可能性があります。

「生涯現役を新常識にする」というアルコット標準を世界基準に!

そのような未来を目指し、一人でも多くの人が健康で「ありがとう」に囲まれながら働き続けられる社会を実現したい。その想いを胸に、社員一丸となって日々奮闘する今日この頃です。

(次号は特定医療法人財団五省会の
理事長 西能 淳 様です。)

会 員 の 入 退 会

(7月幹事会)

1. 最近思うこと

(社業についての抱負や最近の政治・経済・社会情勢等についての考えなど)

2. 生活信条(座右の銘等)

3. 趣味

入 会



え ぐさ み ゆ き
江 草 未由紀

(株)北陸銀行

執行役員

(紹介者：麦野英順氏)



こ ばやし ま さ ひ こ
小 林 正 彦

(株)北陸銀行

取締役専務執行役員

(紹介者：麦野英順氏)

1. 地方には自然・食・文化やゆとりなど、真の豊かさがあります。これに惹かれる人達がもたらす活力で、課題先進地域たる富山が元気になれば、日本の未来も明るくなるはず。
2. 意すれば成す。どうすれば成せるかを皆様とともに考えたいと思います。
3. 観劇、文化遺産めぐり

1. AI普及でどんな世界になるのだろうか。良い面と副作用的な面の両面並進していくと思うが、それぞれに対峙しトータルでプラスの世界を追及していく流れなのだろう、当面は。
2. (失敗の)経験なくして成長なし。
3. ゴルフ、読書(ペーパー)



た に し げ り ゅ う じ
谷 繁 竜 司

(株)サプラ

常務取締役

経営管理本部長

(紹介者：平田純一氏)



は ね た じ ゅ ん
羽 田 純

(株)ROLE

代表取締役

(紹介者：橋本 淳氏)
花田将司氏)

1. 新しい出会いや学びを楽しみながら視野を広げ、社業やグループの発展に寄与すると共に、富山県や北陸で暮らす方々の生活がより快適で豊かになるように努めてまいります。
2. 「昨日より今日、今日より明日」という考え方が大事だと思っています。
3. 旅行、話題の飲食店巡り

1. 我々デザイン業の価値は生成AIの台頭によって、この数年で大きく書き変わります。時代の節目をリアルタイムで感じる経験は初めてなので、楽しく勉強していきたい。
2. 仕事では常に、「これからのつくりかた」をクリエイティブな視点で探求しています。
3. 今年、ゴルフの練習を始めました。



ふる かわ ただし
古 川 忠
北陸電気工事(株)
常務取締役
(紹介者：山崎勇志氏)

1. 物価高騰や人材不足は大きな経営課題となっていますが、経済の変革を進める好機と捉えています。価格転嫁やDX・AIの活用、人への投資を加速させる契機となっています。
2. 変化に恐れる事なく、常に挑戦し続ける。
3. 旅行で47都道府県制覇が目標



みず まき たか こ
水 牧 貴 子
STILL GARDEN
代表
(紹介者：石坂兼人氏)

1. 先の見えない時代だからこそ、判断を急がず対話を通じて考えを整理する時間が、経営にも人にもますます大切だと感じています。
2. 良い判断は、整った状態から生まれる。
3. 美術館巡り、旅行、庭巡り



もり のり ゆき
森 規 幸
(株)チューリップテレビ
代表取締役社長
(紹介者：山野昌道氏)

1. 開局の1990年に新卒で入社しました。開局の思いを受け継ぎ、地域に徹底的に寄り添う、最も活気のある放送局とし「あしたに、もっとハッピーを。」県民の皆様に届けます。
2. 圧倒的な信頼
至誠 質実 剛健
3. バスケットボール観戦 相撲観戦



よこ やま ゆき のり
横 山 征 典
富山アジア経済技術協同組合
代表理事
(紹介者：佐藤幸博氏)

1. 仕事で東南アジア（ベトナム、フィリピン、インドネシア、スリランカ）へ行く機会も多く、日本の経済力の低下を感じます。これら国々と日本の発展を目標に活動しています。
2. 「為せば成る 為さねば成らぬ 何事も」
3. 旅行、ドライブ、写真撮影、映画鑑賞



よね だ けい じゅ
米 田 恵 樹
ラック(株)
代表取締役
(紹介者：橋本 淳氏
花田将司氏)

1. 日本が日本たる所以は、そこで日本人が生活を営んでいるからなんだと、改めて実感。頑張ろう熊本。頑張ろう日本。
2. 答えは全て心の内に
3. 剣道、ゴルフ、キャンプ、バーベキュー

交 代



い ぐち ゆう すけ
井 口 裕 介
(株)北日本新聞社
取締役経営企画局長
(前：織田浩之氏)

1. 多様な会員の皆さまと学び合い、提言と実行に尽力いたします。
2. 悠々と急ぐ
3. ウォーキング



い わ し ま た つ ろう
岩 島 達 郎
日産富山(株)
代表取締役社長
(前：井元謙治氏)

1. 企業使命の実現
 - ①お客さまの新しいモビリティライフの実現
 - ②地域社会の発展に貢献
 - ③同時に社員の物心両面の幸せを追求
2. 敬天愛人
3. 読書、旅行、鉄道



お か も と か ず あ き
岡 本 和 明
(株)北陸日立
代表取締役社長
(前：木村雅彦氏)

1. 地政学リスクや人口減少など課題の多い時代だからこそ、企業の枠を超えた対話や共創が大切だと感じます。弊社もその一員として富山の発展に微力ながら尽力してまいります。
2. 浄土真宗の寺で育ち、ご縁を大切にするという意味で「おまかせ」を大切にしています。
3. ゴルフ



い ま む ら し げ お
今 村 栄 夫
北陸電機製造(株)
代表取締役社長
(前：大西賢治氏)

1. 北陸唯一の変圧器メーカーとして、製品のご提供を通じ、富山のお客さまおよび地域社会に貢献してまいります。
2. 稲盛和夫氏の「謙虚にして驕らず」という言葉を大切にしています。
3. ランニング、バイクツーリング



う ち だ い っ べい
内 田 一 平
(株)商工組合中央金庫
富山支店長
(前：藤村洋志氏)

1. 地政学リスク等、外部環境が目まぐるしく変化し、非常に先が見通しづらい環境下ではありますが、富山県経済の活性化に向け、しっかり努めて参りたいと思います。
2. 思いやり 利他の精神
3. サッカー観戦



か し ひろし
菓 子 浩
日本放送協会
富山放送局局長
(前：白川友之氏)

1. テレビ離れとネットの躍進の中、個人向けにカスタマイズされた情報が社会の不寛容さを加速させることを危惧している。多様な視点を届ける役割をしっかりと果たしたい。
2. 「順逆は大丈夫の試金石」(渋沢栄一)。ピンチをチャンスに変える姿勢を大切に。
3. 舞台鑑賞、ブラジル音楽、日帰り温泉巡り



かじ さき はる やす
梶 崎 晴 康
北陸電力(株)
常務執行役員
(前：林 政義氏)

1. 電気事業は大きな転換期を迎えているが、そうした中でも、引続き電力の安定供給と脱炭素化の両立という社会的要請に応えていきたい。
2. 謙虚に正直に
3. ランニング



かわ はら まさ と
川 原 雅 人
北陸電力(株)
常務執行役員
(前：川本吉伸氏)

1. ・富山県の人口減少の加速化に危機感
・「少子高齢化の急進」と「若年層（特に女性）の県外流出」（私の娘も）
・これに伴う生産年齢人口の減少や交通インフラへの影響
2. 嬉しい時はおかげさま
困った時はお互いさま
頑張った人にはお疲れさま
3. 家庭菜園（2坪、収穫した野菜の料理）



しま だ ひさ ゆき
島 田 久 幸
ALSOK 富山(株)
代表取締役社長
(前：木下 勲氏)

1. 本年7月1日、当社は富山県総合警備保障(株)からALSOK富山(株)に商号変更し、セキュリティの枠に留まらず多様なリスクに対応する企業へと進化することを目指します。
2. 走力・球際・切替
3. スポーツ観戦、コーヒーハンドドリップ



かわく ぼ けん いち
川久保 研 一
北電情報システムサービス(株)
代表取締役社長
(前：多賀淳二氏)

1. 進展著しいIT関連技術を適切に活用して、お客さまの競争力向上、ひいては豊かな社会づくりに貢献して参りたいと思います。何卒、よろしくお願い申し上げます。
2. 日新（日に新た、日々に新たなり）
3. セーリング、トレッキング、里山活動



きた がわ ひろ くに
北 川 博 邦
(一財)北陸経済研究所
理事長
(前：沼田雅博氏)

1. 不確実で変化の大きい時代ですが、地域の可能性を大きく広げる機会にもなりうると思います。地域に根差したシンクタンクとして役立つ「知」の提供に努めてまいります。
2. アップデートし続ける
3. 孫、ゴルフ



た なか しげ と
田 中 重 人
富山フューチャー開発(株)
取締役 業務統括本部 本部長
(前：前田展宏氏)

1. 従来のコスト削減型経営から、高付加価値化と適切な価格転嫁を進める「持続的な賃上げ」への転換期であり、より戦略的な投資を行うと共にCSとESの向上に取り組めます。
2. 「自利利他」利他の心で地域に入り、自利の成果で持続させ、幸福な循環を生み出したい。
3. ゴルフ 今年からチャレンジしています！



た なか まこと
田 中 誠
(株)福井銀行 富山支店
富山支店長 兼 新庄支店長
兼 富山南支店長
(前：丸田康央氏)

1. 日本も金利のある時代、インフレの時代となりました。価格転嫁は難しいところですが、良いものを適正な価格で提供する、値決めが重要だと感じています。
2. 今日なし得るだけのことに全力を尽くせ、しからば明日は一段の進歩あらん
3. ランニング、フィールドホッケー



つち や ひで ゆき
土 屋 秀 行
(株)ドコモCS北陸
富山支店長
(前：雄谷秀次氏)

1. 富山を深く知ることがお客さまや地域への理解につながると考えております。交流と学びを通じて、富山のさらなる発展に貢献したいと思います。
2. 現場に学び、人との縁を大切にする。
3. 街歩き・地域探訪、旅行



は ま だ さとし
濱 田 賢
(株)延楽
専務取締役
(前：濱田政利氏)

1. 文化的で心豊かな日本を作る会社となるよう邁進します。
他責にならず、私達が源となり、日本の文化・経済の発展に寄与できることに集中していきたいと考えております。
2. 信は力なり。柔よく剛を制す。
3. テニス、美術鑑賞、上映会開催、映像制作等



つか きき かつ のり
塚 崎 勝 訓
北陸電力送配電(株)
代表取締役社長
(前：棚田一也氏)

1. 地域の産業や生活を下支えするインフラ基盤をしっかりと守り、北陸地域の発展に尽力していきます。
2. 「不易流行」守り継続していく事、時代に合わせて変えていく事の両立を意識しています。
3. キャンプ、スキー、ゴルフ



ぬ ま た やす し
沼 田 康 至
北銀リース(株)
代表取締役社長
(前：南 直樹氏)

1. 金利ある世界への移行など経済の転換期において、企業の挑戦と変革に伴走し、地域の豊かな未来を皆様と共創したいと思います。
2. 着眼大局着手小局
3. ゴルフ、家庭菜園



は や し あき ひと
林 亮 仁
(株)山秀木材ヤマヒデホーム
執行役員
(前：山田由理枝氏)

1. 物価高や人手不足など、大変難しい状況ではありますが、日々学ぶ姿勢を忘れずに、新しい事へ積極的に挑戦をして、地域社会への貢献に繋がるよう努めてまいります。
2. どんな事にも慎始敬終を実行するよう心がけてます。
3. スポーツ観戦（大谷選手の大ファンです）



ひら た わたる
平 田 互
北陸電気工事(株)
代表取締役会長
(前：水谷和久氏)

1. 近年頻発するウクライナや中東など地政学リスクの顕在化、災害の激甚化に機動的に対応出来る体制、マニュアル等の整備を平時から行っておく必要がある。
2. 明るく楽しく元気よく（笑いの絶えない和気藹々とした職場環境で自己実現を）
3. 映画鑑賞（名画中心）、YouTube 鑑賞



みず の か おり
水 野 香 織
水新建設(株)
代表取締役
(前：水野幸裕氏)

1. 人手不足や災害リスクが高まる中、建設業の価値向上と地域の安全・そして発展に尽力したいと思います。
2. 至誠通天
3. 旅行、映画鑑賞、ジョギング、ゴルフ



みや ざき とも あき
宮 崎 智 昭
(株)アイザック・ユー
代表取締役社長
(前：野住武弘氏)

1. 今年25周年を迎えます。
上下の報告、左右の連絡、上下左右にとられない腹を割った相談を実践し、風通しの良い組織、職場環境をつくりたい。
2. 「人事を尽くして天命を待つ」
自分にできる努力をしたうえで結果は天の采配にまかせる
3. ゴルフ（月2回）、読書（月1冊）



もり た かつ や
森 田 勝 也
ほくほくTT証券(株)
代表取締役社長
(前：梶谷英治氏)

1. 銀行を退任し、初めての証券業関連になりますので、一から勉強しております。ほくほくFGの一員として、取引先各企業、個人の皆様の豊かな未来に貢献して参ります。
2. 特にございません。
3. ゴルフ、ドライブ

退 会

高 木 奈津美 CPC (株) 代表取締役

(令和8年7月27日現在 会員数453名)

今後の予定

開催日	対 象	行 事	場 所
10月14日(水) ～21日(水)	全会員	第44回海外経済視察	フランス
10月23日(金)	正副代表幹事 交流委員会担当役員 委員長	第34回経済同友会中央日本地区会議	石川県金沢市
10月26日(月)	幹事以上	10月幹事会	オークスカナルパーク ホテル富山
10月26日(月)	全会員	10月会員定例会 講師：日本銀行金沢支店 支店長 今久保 圭 氏	オークスカナルパーク ホテル富山
12月9日(水)	全会員	海外経済視察報告会・年末懇親会	A N A クラウンプラザ ホテル富山
1月13日(水)	幹事以上	新年幹事会・富山県知事との昼食会	富山電気ビルディング



〔表紙写真〕

新会員歓迎オリエンテーション

8月24日(月)、オークスカナルパークホテル富山にて新会員歓迎オリエンテーションを開催。55名の新会員が参加し交流を深めました。

発 行 所

富山経済同友会

富山市牛島新町5番5号 インテックビル4階

電 話 (076) 444-0660

F A X (076) 444-0661

e-mail: doyukai@po.hitwave.or.jp

<https://www.doyukai.org/>



日本本土東西南北端



延期していることありませんか？

株式会社三四五建築研究所 代表

稲葉 伸一

思い起こせ、君はどれほど前からこれらのことを延期しているのか。(中略)時は過ぎ去り、君も過ぎ去り、機会は二度と再び君のものとならない。

2021年55歳の時この文章を読んで自問しました。何を延期しているかな、いくつもあるな。時間制限があるもの何かな、北海道だ！北海道走ってない。私の趣味の一つはバイクに乗ることです。親の目を盗んで免許を取り18歳から乗っています。東京で就職したころにブランクがありますが今まで乗り続けてきました。

日本のバイカーならいつか走りたい北の大地、北海道。「北海道をバイクで走る！」まだ時は過ぎ去っていない。やることが決まりました。とりあえず地図を買ってきてネットで情報を集め一人で行くつもりで準備を始めました。

季節、ルート、日程、装備などなど。「北海道走りに行く」飲み会でボソッと話をすると、俺も行きます！と、私の他にも延期していた4

人が集まり5人で行くことになりました。目的地は日本本土最北端、宗谷岬。新潟港からフェリーに乗って小樽港に早朝に到着、コンビニおにぎり食べて走り出します。バイクでフェリー、海と大湿原の間の一本道、湖畔のキャンプ、キタキツネの襲撃、道を横切るヒグマ、そこらにいるエゾジカ、野生のラッコ、1時間で20度以上の気温差、初めて体験することばかりでした。自然の中に人間が間借りさせてもらっている感じです。ロングツーリングが楽しくなって次は最南端（鹿児島県）、最東端（根室市）、そして最西端（長崎県）を制覇。この原稿が掲載される頃には3回目の北海道ツーリングから帰ってきているはずです。今回は9人で出発して上陸したら別れ、最終日に合流して宴会です。人生の収穫期を楽しむために元気でいたいので今年から筋トレ始めたら、なんか髪の毛増えた気がする。青春まだ終わってくない？

皆さん、延期していることありませんか？